歴史地理学 146 1～19 1989. 9

中世・ヴィスビーとベルゲンのドイツ人居留地

藤 岡 ひろ子

Ⅰ. はじめに
Ⅱ. 問題の設定と方法
Ⅲ. 北方貿易の概要と居留地の成立
Ⅳ. ヴィスビーのドイツ商人居留地
(1) ロシア交易の仲継基地としてのヴィスビー
(2) ドイツ商人地区と教会の立地
Ⅴ. ベルゲンの商館地区の成立と構造
(1) マーケットの発生
(2) ドイツ人の冬季滞在と商館地区の成立
(3) ドイツ手工業者の渡来
(4) 商館地区の内部構造
(5) 住宅地域の分化と教区教会
Ⅵ. むすび

Ⅰ. はじめに

世界の港市のなかでは，複数の民族が交易のために渡来し，居住と自由交易の特権を得て貿易業務地区を形成した例は多い。ヨーロッパの中世の例を見ても，船の接岸しうる水路にすでに発生していた市場を核として，遠隔地からの商人がその都市の建設に参与したり，貿易業務の機能地区に自国の様式をもった市街地を形成する場合が少なくない。トルンやケーニヒスベルク，ダンチヒなどは，主としてドイツのリューベックの商人が都市建設に関与した[1]例となっている。

本論は，北欧の島ゴートランドの港市ヴィスビーとノルウェー西岸のベルゲンの2都市における中世のドイツ人居留地の成立過程とその貿易機能地域の内部構造をさぐろうとするものである。筆者が対象とする2都市は，ハンザ都市のおこなった北方貿易では重要な役割を果たした都市であり，歴史学の分野では，既に多くの研究が積み上げられてきた。その視点も通史をはじめ社会経済，法制，貿易，交通など多角的な分野から検討されてきた。しかし，一般に地理的な視点での解明は極めて少なく，わが国ではまだこの目的での地域研究の手掛かりとなる地理的文献は数少ないように思われる。

筆者は先に，神戸[2)3)]，横浜[4)]における外国人居留地や上海[5)]の租界などの成立，およびその貿易機能を分析し，それらをとり込んで形成された貿易都市の中心市街地の構造に関しての研究報告をおこなった。

その結果，多様な世界の貿易港市のなかから，外国人居留地を核として発展した例を見出し，その比較研究をおこなうことをその後の重要な課題と考えた。本稿はその一環としての研究である。

Ⅱ. 問題の設定と方法

本稿で，ヴィスビーとベルゲンのドイツ人居留地を研究の対象地域としたのは，次のような考えによるものである。

ヴィスビーは12世紀，既にドイツ人の遍歴商人の団体と，定住商人の団体によって，農漁村的な前都市的集落から，西ヨーロッパの様式をとり入れて13世紀には北方貿易の拠点として発展した港市である。バルト海交易の核心であると同時に，ドイツ人のロシア交易の仲継基地として重要であった。この都市が小規模な都市であるのに比べて，多数の教会が立地分布したことに特に注目しなければならない。

さて中世北方の教会は，商人の活動の保護の

みでなく，まだ異教徒の間に残るヴァイキング時代の原始的な慣習を新しい合理的な社会通念に導くための文化的役割を果した。また，商人も布教に極めて協力的であった。こうした時代背景から本論では，ヴィスビーでは教会の立地パターンとドイツ人商業地域との関連に焦点をあてて検討をすすめる。

また，ベルゲンは，都市ハンザがその充実した力を発揮するようになった14世紀後半から16世紀に四大商館の一つとしてその機能を発揮し，17世紀には衰微した。ここではその商館地区における商業機能地域と，ドイツ人とドイツ手工業者，そして，ノルウェー人の形成した居住区の問題に焦点をあてることにする。時代設定で，中世というあいまいな時期の呼称を用いたが，ヴィスビーでは13世紀を中心に，ベルゲンでは13世紀から16世紀における交易都市を念頭においた。

研究資料として，古地図は極めて重要である。ヴィスビーでは，1361年の古地図（図2），ベルゲンでは1581年の古地図（図4）を参考とした。ハンザ都市に関する資料のうち，通史ではPhilippe, Dollinger の "The German Hansa" (1971)[6] や，高橋理の『ハンザ同盟』(1980)[7] によった。また，1987年の筆者のヴィスビー，ベルゲンでの巡検の結果と各資料を総合することに努めた。

Ⅲ. 北方貿易の概要と居留地の成立

ここでは「居留地」の形成を検討する前提として，中世における商人の活動と北方貿易の概要について述べなければならない。

11世紀ごろから，ヨーロッパでは遠隔地にまで足を運び，物産の交易をおこなって遍歴する商人が出現している。彼等は，その後，特定の地区に定住するようになったが，その地点は，宗教や文化の核となっている教会・修道院，あるいは封建領主などの居館が存在し，既にそれを中心にした一定の圏域を形成しているようなところであった[8]。

その商人は，次第に広域の物産をとり扱い，商人の共同体であるギルドの組織力をもって定住地を形成した。ゲルマン圏域では，この定住地をヴィク（Wik）とよんでいた。このヴィクという語尾をもつ都市が11～13世紀ごろに急増した[9]といわれるが，各地での市場定住をする商人の集落の発生と時期を同じくして，北方のバルト海沿岸や，スカンジナヴィア半島にも西ヨーロッパにむけて遍歴商人が，夏の航海の安全な時期を選んで渡航するようになった。彼等を，まだ文化が未成熟である上に，ヴァイキング時代の原始的な習俗が改善されない状態の危険の多い北方地域へと向かわせたのは，時の機運だけではなかった。

中世西ヨーロッパを中心とする大規模な北方貿易の発端は，キリスト教の普及と密接な関連があった。北方貿易での主要な輸入品は，魚類や木材，毛皮であった。キリスト教における四旬節に肉食を絶つことが厳格に守られた[10]この時代に，北方産の価格の安い魚類が大量に要望された。

また各地の教会の建築に必要な木材および石材をはじめ，教会用のろうそくの原料となったワックスや獣脂も，北方の原始林が供給源であった。北方産の毛皮類は，王侯・貴族階級のみでなく，次第に市民の要望するところとなっていた。それらはバター，蜜，ピッチ，鉄，銅のような資源が生産されるバルト海沿岸や，ロシア，スカンジナヴィアに求められた。一方，北欧，殊にスカンジナヴィアでは，13世紀ごろ人口増加のきざしがあり，厳しい自然条件や耕地が貧弱なため，穀物類が不足した[11]ので，穀物をもたらす西ヨーロッパの商人の渡航を受容し，代わりに北方の一次産品を供給するという交易体制が生じた。

以上のように北方貿易では，日常生活に密着した物資と，キリスト教普及の世相を反映する商品が主体であり，東方の贅沢な品を扱う南方貿易に比べて実質的な日用品の交易に特色があった。

また南方貿易に比べて，その輸送には種々の困難が伴っていた。少なくとも15世紀までは，

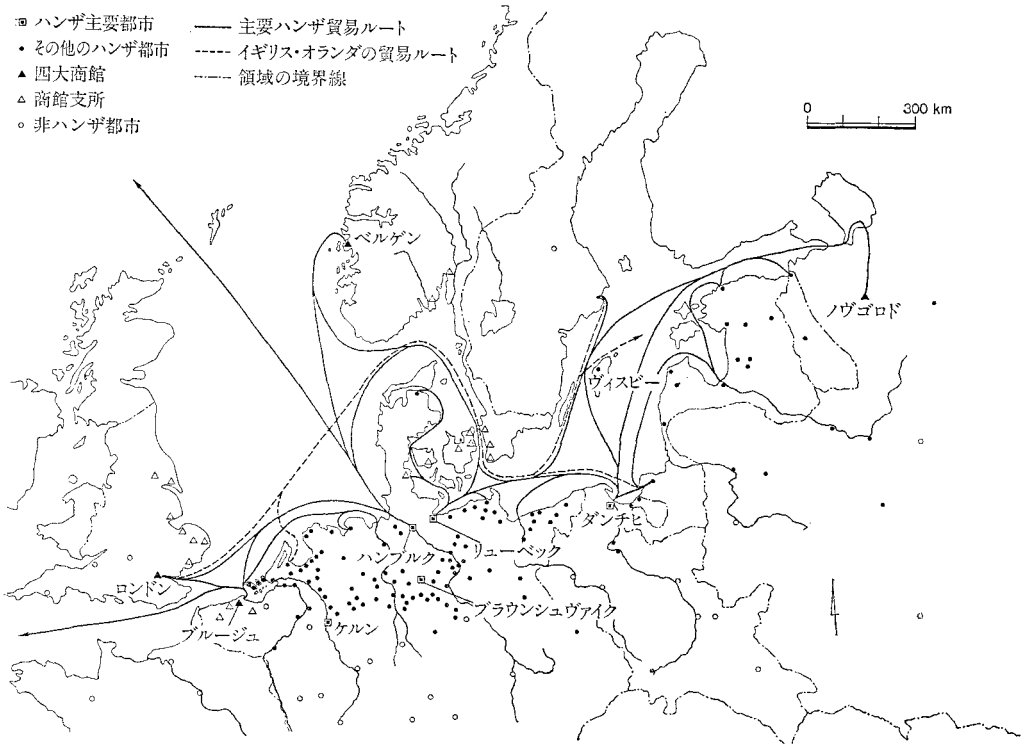


図1　ハンザ都市の分布と主要航路（1370～1500年）

出典：The New Cambridge Modern History Atlas. Edited by Darby, H.C. and Fullard, H., Cambridge University Press. 1978, pp. 118-119.

航行のための位置の観測は天測によらねばならなかったし，水深は丹念に主要地点に錘を下ろして計測された[12]。北方航路の冬の航行は海難の危険にさらされ，夏季では海賊の出没に悩まされた。12世紀末にヨーロッパにあらわれた，幅が広く，大量の積み荷が可能で，かつ安定性の高いコッゲ（Cog or Kogge）[13]船が，ハンザの北方航路に適用されたことは，北方貿易を有利に展開させる契機となった。

さらにこの貿易の屋台骨となったのは，商人の団体の結束であった。ヨーロッパ各地には，多様な性格の商人団体の組織が結成された。商人相互の利益を守るギルドの発達のなかで，もっとも大きい組織を成立させたハンザ同盟は，北方貿易に大きく関与した商人の団体であるとともに，都市の連合体でもあった。中世の商人の基地となった居留地も，このハンザ同盟との関連なしに考えることはできないのである。

さて，北方貿易における居留地は，夏季のみの商人の基地と，冬季を含む通年にわたって外国人が居住する居留地とがある。前者の例としては，スカンジナヴィア半島南部の鰊漁業基地スコーネ[14]に設けられた Ved とよばれる共同体があげられる。この基地には，ドイツ，イギリス，オランダ，デンマークの商人が協力して鰊魚の交易をおこなったが，彼等の間には，デンマーク人の監督の下に自治組織が運営され，作業場，教会，墓地をもつ居留地を成立させた。ここには約30の居留地があり，塩蔵魚や，のちには北方の一次産品を取引する市が開かれている。

後者の例となるヴィスビーやベルゲンの居留

表1　ヴィスビー，ベルゲン関係年表

7～11C頃	ゴートランドに，ヴァイキングの複数の寄航基地があった。
11～12C	ヴィスビーに木と石で造られた礼拝堂が建てられた。
1161年	ゴートランド人とドイツ商人の間に，平等の通商権が認められた。（ハインリッヒ獅子王による調停文書）
12C末頃	ノヴゴロド・ゴートランド人のゴート商館についで，ドイツ人の聖ペーター・ホーフ（ノヴゴロド商館）が設立された。
1225年	ヴィスビー・マリア教会，商人教会となる。
13C	ヴィスビーの城壁建設・ドイツ商人団とヴィスビー人による参事会成立。（商人ハンザの時代）
1259年	ベルゲンで，ドイツ商人，冬も滞在を開始。
1294年	ドイツ商人に対し，ノルウェー王が，通商特権を与えた。
1298年	ヴィスビー商人団の印章の使用禁止。（商人ハンザの終り）
13C末	リューベック，ハンザの指導権を掌握。
14C半ば	ハンザ都市，在外商館を諸都市に従属させた。（都市ハンザの時代）
1408年	ベルゲン・マリア教会，ドイツ人教会となる。

地でも，当初は夏のみ，のちには冬も滞在するようになったが，基本原則として，支配者たる王や領主との間に平和的・合法的な手続きがおこなわれ，居住と貿易の自由が認められていた。その後，なんらかの自治組織を持ち，居留民の代表者が仲間を裁く権利を持つようになり，居留地に必要な都市の機能が配置されている。

Ⅳ. ヴィスビーのドイツ商人居留地

(1)　ロシア交易の仲継基地としてのヴィスビー

ゴートランドは，バルト海に散在する島々の中では最大の島で，面積は約3,173km²である。北東から南西に走るゴートランドライムストーン地域のうちで，粘土のよく混在するライムストーン低地において，わずかに農耕がおこなわれるにすぎない[15]。古代から，この島自体，資源が乏しく生産性が低い土地であったせいか，ゴートランドの農漁民たちは，ヴァイキング外征の基地を島内にいくつかもっていた。7～8世紀ごろ，この島の西に位置する集落のヴィスビーも，その一つの拠点であった。

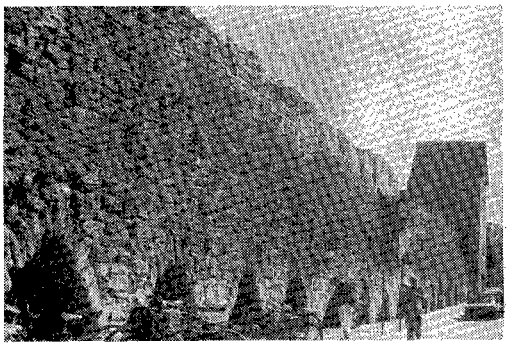


写真1　ヴィスビーの城壁
13世紀に市を囲郭している
（1987年8月，藤岡撮影）

最近のゴートランドにおける考古学的調査の結果，全島各地から約10万枚にも及ぶ古いコインが発見されている。このコインは，イギリス，ドイツ，イタリアのほか，ビザンチンやアラブなどのものを含み，ハンザ同盟都市として交易市場を拡大する以前に，すでにこの島が広範にわたる異国と接触があったことが確認されている[16]。また，ヴァイキングの研究家ヨハネス・ブレンステッズ[17]も，ラトヴィアで見出されたゴートランド人の墓の副葬品などの検証から，彼等は明らかに平和的な交易民であったとし，その遠征行為に好意的な判断を示している。ゴートランドには11世紀ごろ，バルト海沿岸諸国からの渡航者が訪れ，キリスト教が普及しはじめたが，農漁民は海洋交易に益々積極的であった。

ヴィスビーに関しての確実な資料が乏しいが，P．ドーリンゲル[18]のハンザに関する研究を参考に，ハンザ都市として発展する経過を検討すると，次の諸点が重要である。

第1に，ゴートランド人はロシア交易の先駆的な基地開拓者であったことである。彼等は

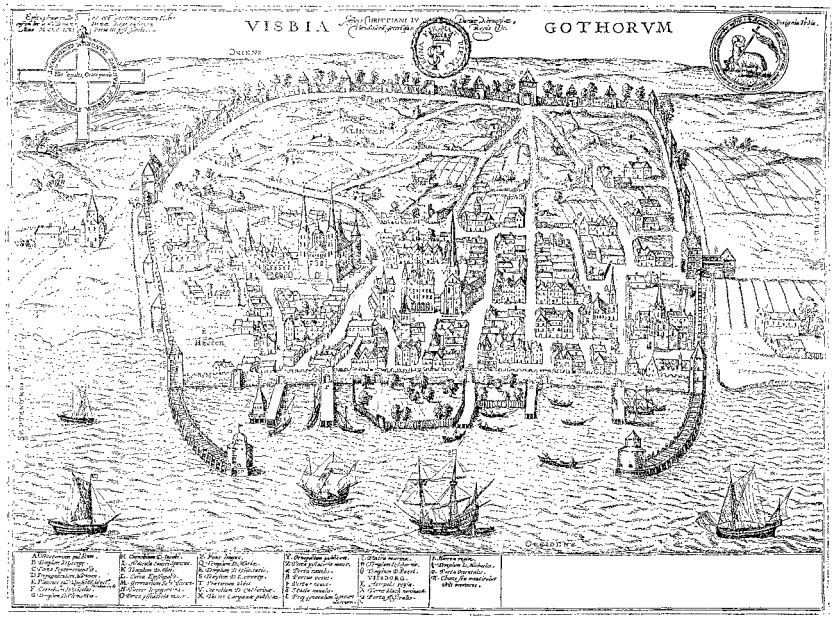


図2　ヴィスビーの古地図

11世紀以後には，ヴァイキング的な活動を中止し，スウェーデン中部のシグトゥーナに交易のため定期的に渡航した。しかし，最も重点的な渡航先は，ロシアのノヴゴロドであった。主な目的は，ロシア産の毛皮の取引であった。ノヴゴロドには，ビザンチン，キエフなどを経てもたらされる東洋の奢侈品が集められていたので，毛皮とともに，それらを自国に運び，イギリスをはじめ，ヨーロッパ諸都市に運ぶ貿易を展開した。

彼等の交易は，北方資源の仲継というかたちで進められていった。ノヴゴロドには，ゴートランド人の一つの交易センターがあり，そこに12世紀初めには，聖オラフの聖堂がゴートランド商人によって献呈され，教会は商人達の活動を保護した。のちに，ゴートランド人の開拓した商業基地に，ドイツハンザの主力が居留し，「商館」[19]を設定するようになった。

第2に，ドイツ商人のゴートランドへの渡航と，通商条約の成立の問題がある。ゴートランドへは，12世紀頃までに屢々ドイツ人が渡航していた。北方貿易に意欲的であったドイツ商人は，ロシアの毛皮貿易に着目し，ヴィスビーをその仲継地とすることを意図した。当時の船の規模や航海術では，一挙にノヴゴロドに達することは不可能に近いことであったからである[20]。

ヴィスビーは仲継地として地理的位置が好適である上に，ドイツ人が北方貿易の活動期に入る以前からバルト海商業体制の核心的な地位をもち，ロシア交易に関しての先達であった。一方，ドイツ人とゴートランド人との間には，絶え間なく紛争が起こっていた。

この争いを調停し，平和的交易への路線に導いたのが，リューベックの「ヘンリー獅子公」[21]であった。高橋理[22]は，この時の調停文書が，平和条約・通商条約・ドイツ商人の特権状という3種の性格をもっていたことを重視し，この手続きによって「戦闘の可能性を潜在させていたヴァイキング貿易に終止符が打たれ，正常貿易の基礎が初めて据えられた」としている。

第3に，ヴィスビーにおけるドイツ商人の団体組織に注目する必要がある。

ドイツの商人の団体の一つは来訪商人のグループであり，他は定住商人のグループであった。彼等は，リューベック，ゾースト，ドルトムントなどからの商人[23]であった。

商人団体が出現し「商人ハンザの時代」[24]を推進したのは，ヴィスビーにおけるドイツ商人の特色であり，ヴィスビーの中心部に13世紀を中心に形成されたのは「商人ハンザの居留地」であった。

ヴィスビー商人団体の活動は，あくまでもここを基地としてロシアとの毛皮貿易を成功させるためのものであった。ノヴゴロドにおいて，ヴィスビーが北方貿易で商業や司法上で優れた地位を保った[25]時代は13世紀半ば頃であったが，1298年には，ハンザ諸都市の会議でその地位が否定され，その後リューベックが諸都市の盟主となる方向がとられた。ノヴゴロドでのドイツ人の司法上の上訴地はリューベックに移った。

(2) ドイツ商人地区と教会の立地

13世紀に入り，ヴィスビーの町の周囲に石の城壁が施されている。城壁の周囲は約3㎞，平均の高さは約6mで，高度の低い海側と東の高台の地形に応じて城壁の高さを変化させた。大小あわせて50余りの門があり，古地図を見ると，北と南に小さい濠がめぐらされている。

中世ドイツにおける遍歴商人の基地の「ヴィク」は，11世紀ごろには木柵・土壁のようなものに囲まれている程度で，のちに，そこから近接した位置にあった教会を中心とする「ブルク」とを併せて堅固な城壁で囲郭され，別々の秩序を一つに統一させた例[26]が多い。その現象と同一ではないが，ヴィスビーが，外洋に向けて活動をする農漁民の小集落から，ドイツ商人団体の定住地を包含して，当時のヨーロッパの都市の体制に近い，行政の組織をもつ都市にと変革したことと，その内部に防御すべき経済共同体を形成したことは，この城壁の建造の意義を示すものである。現在ヴィスビーの古い市街地にはなお城壁が存続し，西に向かって開けた港をもつ，南北約1㎞，東西約650mの小規模な町である。この囲郭内には，その小さい市の規模に対して，15以上という多くの教会が立地している。

現在でも，複数の外国人の居住する都市では，屢々その民族ごとの教区教会があり，その活動は精神的・宗教的な目的のほか，文化・社交など多岐にわたっているが，中世における民間の商業活動と教会との関係には，この時代独自の姿があった。

この時期の教会は，第1に，商人の交易行動に対して唯一信頼のおける保護者であった。例えば，遠隔地に遍歴する商人に対しての道案内や，病気や災難に対しての助力だけでない。まだ未開で，すべてが不安な状態の北方においては，商業上の重要な財源や書類の保管に最も安全が確保される所は教会であった。

ヴィスビーと最も関連の深い北方交易の拠点のノヴゴロドの例を見ると，ここは1000年のころ，すでに大司教が住む宗教都市[27]であり，ヴィスビー商人の渡航に当たって，そこに安全な宿舎や倉庫が確保された。ドイツ商人が，ヴィスビーを媒介としてノヴゴロドに夏と冬との渡航に交代制をとり，ロシアの厳冬季にも居留することのできるようになったのは，ヴィスビー人の聖オーラフ教会の庇護によるものであった。後には，聖ペーターホーフがドイツ人商人の独自の活動の場として，安全な環境を与えていた。ここの聖ペーター寺院は商人の礼拝所であり，司教の管理や君主の支配下に置かれることなく，後にドイツ人の専用の商人教会となった。そこでは商人の会議ももたれていた。

それでは，教会は商人教会としての役割をもつのみかというと，そうではない。具体性は欠くとしても，キリスト教布教によって波及した文化圏を確立することが，商業活動の圏域を広げることであった。現地の人々と渡航商人との間に文化の同一基盤を築き，その上で相互理解を進めない限り，平和的な交易の恒常性を保つことはできないという前提があった。ヴァイキング時代の原始的な古い慣習の残る社会では当然と考えられていた決闘や苛酷な体罰などを廃し，より合理的な新しい法[28]にもとづいた交易を推進させるためには，渡航商人にとってキリスト教の布教が最も切実な時代であった。以上，交易地開拓と教会立地の関連について述べた。

ここでは，教会の地理的な立地分布を指標として，13世紀を中心としたヴィスビーの内部構造を検討することにする。ヴィスビー最古の地図とされる1361年の "Visbia Gotborum"[29]や，地誌的な解説の資料[30]，それに現在の地図を参考とし，筆者の巡検の結果と総合して図3を作成し，この課題を検討する資料とした。ドイツ人の形成した商業地域を見出すための指標は，教会のほか，タウンホール，商人の店舗，作業場，倉庫などがあげられるが，これに関する系統的資料は乏しいため，上記の資料の記述の範囲で，それらを検討した。

以上の結果，中世ヴィスビーの都市内部に，次の3地域を見出すことができた。a）ドイツ人渡航以前のゴートランド様式の町，b）ドイツ人渡航者によって形成された市街地，c）王城を中心とした地域などである。

a） ドイツ人渡航以前のゴートランド様式の町 この地区は，11～12世紀ごろ，ヴィスビー最初の聖堂の聖ウーロフス，聖クレメンス，聖ニコライなどのあった北部の一角である。これらは，現在すべて荒廃したものばかりある。聖ウーロフスは，デンマーク王がイェルサレムへの巡礼の途次ここを訪れ，1103年に寄進したのがはじまりとされる[31][32]。聖クレメンスは，その創立は11世紀ごろにさかのぼることができるといわれ，最も古い教会の一つとして論議の対象となっている。同じく聖ニコライも，おそらくその頃の創始と推定されている。

これに関連し，エーディト・エネン[33]が，バルト海を渡航するデンマーク人，ロシア人，スウェーデン人などの渡航者は11～12世紀にそれぞれ一つずつの礼拝堂を建てたらしいこと，その目的は上記の聖堂がドイツ人の渡航以前に商業上の用にも用いられたことを示唆している。

さて，この古い教会の地区には火薬の塔が海岸近くにあり，そこに近く行政の建物が建てられ，路上のマーケットはスペルクスルムの通りに近いところに形成されていたと伝えられる[34]。古地図には，この地区に設けられたヘッテンの広場が描かれている。この広場は，ドイツ人渡来後に出来た中心部の広場と対応される最も古い時期の広場である。

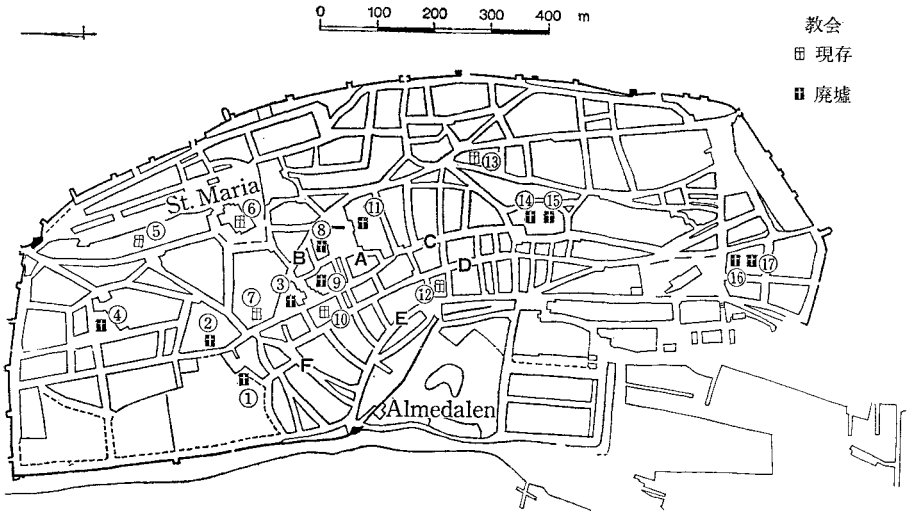
現在，この地区には，伝統的なゴートランド風の小規模な木造の家が多く，石造のドイツ風の家は少ない。

b） ドイツ人の渡航者によって形成された市街地 教会の建設は，彼等の商業基地の安全の確保と強い関連がある。ヴィスビーに充分にキリスト教が浸透していなかった12世紀から13世紀の末にかけて教会が集中したのは，この市の中心部に半円型のセミサークルをなすドロッテン通りの内側と，その周辺である。

その中で，明瞭にドイツ商人教会としての機能をもち，交易の進展とともにロシアのノヴゴロドの聖ペーター寺院と関連を深めたのは，聖マリア教会[35]である。この建物がドイツ人の商業活動の核心からやや離れた高台におかれた理由は，西の海から入港する船にとってのランドマークとしての役割を重要視したものであろう。聖マリア教会は1190～1222年に建造され，1225年には，ヴィスビーのドイツ商人の要請によりドイツ商人教会となった。他の商人教会と同様，司教から独立し，教会に関する権限が商人団に委ねられた。この建物の一角には，商人の財貨，ヴィスビー市の紋章や書類などを保管する部屋が設けられていた。聖マリア教会よりやや西に当るドロッテン通りには，有力なドイツ商人が住んでいたことも確認されている。

他の教会の中には，聖ハンス，聖ペールス[36]のようにウエストフェリアにある建築様式が見られ，そこにドイツ人の墓も多いものや，聖カリンのようにドイツ人の礼拝堂として使われたもの，ゴートランド人が用いなかった様式をもつ聖ラルス[37]などがある。その多くは13世紀，あるいはそれ以後に建てられたものである。しかし，聖マリア教会を除き，具体的な歴史を知るのは困難であり，大半が廃墟のままとなっている。現存するものも，創建の当時とは異なった建築様式に変化している。

行政上，どの程度の中心性をもったのかは明瞭でないが，古いタウンホールの位置は図3の



教会名：
① St. Olofs
② St. Klemens
③ St. Drottens
④ St. Nicolai
⑤ Helgeandskyrkan
⑥ Domkyrkan St. Maria
⑦ Katolskakyrkan
⑧ Templum D. Trimitatis
⑨ St. Lars
⑩ Smyrnakyrkan
⑪ St. Karins
⑫ Frälsningsarmén
⑬ Metodistkirkan
⑭⑮ St. Hans och St. Pers
⑯ St. Johannis
⑰ St. Petri

街路名等：
A. (City Hall)
B. Drottens Gat.
C. Hans Gat.
D. Mellan Gat.
E. Strand Gat.
F. Spelksrum

図3　中世ヴィスビーの教会の分布（ベースマップは現在のものを使用した）

A地点にあったことが，発掘によって確認されている。この位置は市のセミサークルで囲まれた地域の中心部に当たり，全市域の物理的な中核に当たっている。市政機能の運営は，リューベック，ゾースト，ドルトムントからの商人とヴィスビー商人たちの中からそれぞれ選ばれた代表者によっておこなわれた。初期には，遍歴商人団体による参事会と，定住商人による参事会との二つが存在していたが，のちに一つに統合され，ヴィスビー人も加わった行政機構が組織されたとみられる[39]。タウンホールの南の通りには豊富な湧水があり，共同ポンプが配され，また共同浴場もあった[40]ことは，そこが市民にとってアクセスのよいところであったと推定される。

貿易機能は，西に開けた港湾諸施設と，その背後の海岸通りのストランド通り，およびその上にむけて階段状に並行するハンスとメランの2つの通りに配置されていた。

古地図によると，港では城壁の外に構築された長い防波堤が波浪から船を守り，その先に塁がある。突堤は大小5つあり，それぞれ城内に通じる門が備えられていた。

中央には，荷揚げの場となる広場がある。港の背後の海岸通りのストランド通りは，中世の石造で高層のドイツ様式の建物が，現在なお継承されている。この通りに臨む現在の博物館は，かつては酒の蒸留所や，その後兵器を扱う工場などもあったという。これに接する大商人の家には，一時期タウンホールも置かれたことがあった。また「カルフスキンハウス」と名付けられる中世の砂糖・タバコ加工場もあり，そこは貿易品を保管する倉庫を併せもっていた。

ストランド通りを中心とする中世の記念碑的な石造建造物は極めて立派であるが，多くは中世のリューベックの塩の倉庫と同様，貿易用の

倉庫[41]に使用されたもので，その後，時代ごとに変化していると想像されるが，仲継港として倉庫は重要な施設であったことが知られる。さらにこの通りの南には，中世の税務署や大商人の家があったことが確認されている。ハンス，メランの通りにも中世の商人達の家の遺構や倉庫などが見出されるが，おそらく中世のヴィスビーでは，オフィスと倉庫，作業場などが同一建物の中で空間を分かち合っていたものと思われる。商人の住居は，海の見下ろせる上位のところに分布していた。

c） 王城を中心とした地域　市の南の一角には，ヴィスボルグ（Visborgs）城があったことが，古地図に明瞭に描かれている。この城[42]の中には，王宮の聖ハンス教会と聖ペトリ教会が存在し，ドイツ商人地区とは異なる権威がそこに存在したと推測される。15世紀初めには，ポメラリアから来島したエリック王の居城があったと伝えられる。1679年に島がスウェーデン領となったとき，取り払われているとされ，現在は何もない。この周辺には，教会立地は少ない。王城の境域は，中心部のドイツ人の地区から離れた最南に別の小さい囲郭があったことと，王城のための新港があったことが古地図に表現されている。

V．ベルゲンの商館地区の成立と構造

ベルゲンは，北緯60度23分に位置し，最寒月平均気温は1.3℃前後，最暖月平均気温は14～15℃前後で，ノルウェーの中では比較的気候条件のよい西岸の小湾岸に位置している。高緯度のわりに比較的しのぎやすいのは，強力な冬の南西風が中緯度からの温暖な大気を送り込み，メキシコ暖流がこの地区に影響を与えるためである[43]。

(1) マーケットの発生

ベルゲンは，氷河の形成したフィヨルドのVågen という船の寄港できる水路をもち，各地からのアクセスが良好である。既に1100年ごろには，西海岸とノルウェー北部の漁獲品が集荷され，12世紀にはイギリス，オークニー諸島，シェトランド，アイスランドからも船が寄港し，マーケット[44]が開かれた。その交易品は，皮，毛皮，獣肉，ワックス，ホームスパンなどで，最も重要な商品は魚類であった。ドイツ人渡来以前から steven と呼ばれた交易の市が，5月半ばと7～8月ごろを中心に開かれた。12世紀の末頃からは，西ヨーロッパからの遠隔商人がこれに加わった。彼らの主な出身地は，ブレーメン，ケルン，ユトレヒト，フランダースのほか，ゾイデル海の沿岸地などであった。

写真2　ベルゲンの旧商館地域
（1987年8月，藤岡撮影）

ベルゲンは，12～13世紀にはすでに文化の中心であり，13世紀までに約20の教会，5つの修道院が配置され，王の滞在期間の長い行政の中心でもあった[45]。ドイツ人渡来以後も，王城はドイツ人地区に接する位置に存続した。

(2) ドイツ人冬季滞在と商館地区の成立

ドイツハンザの交易のための外地の最も重要な出先機関を「商館」（Kontor）という。大小100余といわれる多様なハンザ都市のなかで，ロンドン，ブルージュ，ノヴゴロド，ベルゲンの4都市に商館が配されていた。これら四大商館は，北方産の主要な一次産品と，各地区の農・工業生産物などをヨーロッパ各地に送るドイツハンザ体制の核であった。商館の設置の時期は，ロンドン，ブルージュ，ノヴゴロドでは12世紀末から13世紀頃と認められる資料があるが，ベルゲンの場合は14世紀半ばとする説が多い[46]。

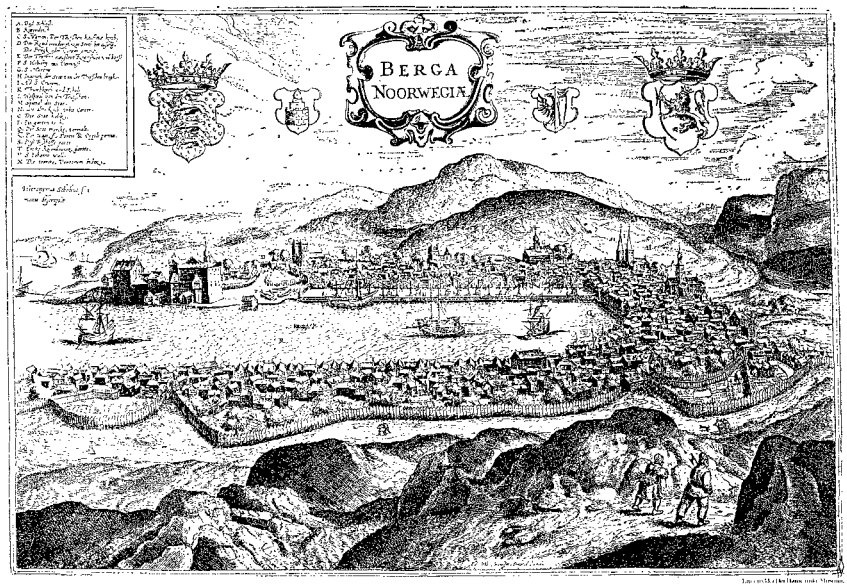


図4　ベルゲンの古地図

ベルゲンに渡航したドイツ商人は，13世紀中頃までは夏季のみの滞在に限られていたが，1259年には，本格的に冬季も滞在するようになった[47]。従って，この1259年の冬季滞在開始の時期には，ドイツのベルゲン商館地域形成の前提となる何らかの居留の拠点がつくられていたはずであり，極めて重要な意味をもつ時期であると考える。具体的には，冬季滞在者がドイツの商人団体の代表者なのか個人なのか明確ではないが，ベルゲンの入江の東岸の地域に宿泊の場を借り受け，その後，それを買いとる者もあった。更に1276年，ノルウェー王マグナス・ハーコンソンは，総括的な町の法を基本に，冬季も滞在する外国人に対し，借家や家屋の所有を正式に認めている[48]。

この時期から，ドイツ商人のベルゲンにおける商業活動が活発となり，イギリス商人に先んじて，対ベルゲン交易に優位を示すようになった。この要因は，ドイツ商人のもたらす価格の低いライ麦が，イギリス商人の運んだ小麦よりも，ノルウェーにとって，より重要であったためと考えられている。

一方，ノルウェー側は，常にドイツ商人の勢力の増大に対して警戒し，可能ならば彼等の商圏の独占行為に制約を与えようとする動向が見られた。一例をあげると，ノルウェーは1250年，リューベックをリーダーとするヴェント諸都市との間に和平と相互自由貿易を約束しながら，その後，以前の提携に制限を加えようと意図した。これに対し，ヴェント諸国は穀物ルートの封鎖という戦略をとったため，1294年にベルゲンは，ヴェントやポメラニア諸都市，その他との間に交易特権の延長をおこなっている[49]。以上の経緯から，ノルウェーの魚類等の輸出と引替えとなる穀物輸入の問題が，ドイツ人の夏のみの滞在から冬季滞在への転換，更には商館の設定を容認するノルウェーの判断に重大な影響を与えたものと思われる。

1294年，ノルウェー当局がドイツ人の活動に対して与えた特権と制約は，次のように要約することができる[50]。

①ドイツ人は，ノルウェーの町での自由交易は認められる。但し，郊外やベルゲン以北，さらにアイスランド及びその属島での商業は禁止される。この制約は，ノルウェー人の利益を守り，ノルウェーの都市の発達を促すものである。

②ノルウェーへのドイツ人の季節的渡航者に対しては，ノルウェー人一般の負っている義務

は免除する。但し，本格的な居留者は，ノルウェー市民と同等の義務を果さなければならない。

③ノルウェー人に与えられる法的保護は，ドイツ人渡航者にも適用される。ノルウェー海岸地域で発生した海難事故に関して，ドイツ人は地域の人々に救助を要求することができる。

④ドイツ商人の積荷に対して，輸入関税が課せられる。

などである。こうして13世紀末には，ドイツ人はノルウェーの法的保護の下に特権を与えられ，ドイツ手工業者と併せ，居留に安定を得て勢力をのばしたものと考えられる。

(3) ドイツ手工業者の渡来

すでに13世紀にはドイツの手工業者達[51]が，ベルゲンだけでなく，オスローやトロンハイムに渡航していた。彼等は，製靴・毛皮製造・洋服縫製・製パン・理髪などの技術者であり，彼等の仲間同士で組織をもち，商品を仲間とノルウェー人に売りさばいた。彼等はドイツハンザ商人と対立的であったが，ノルウェー国王は，強力なハンザ商人の勢力の均衡をはかる意図で，手工業者に対しては商業と居住に理解を示した。手工業者は，北方及び西方の漁民達と接触し，皮革類，獣脂などの交易に当たるようになった。彼等は，ドイツハンザ員が自治権を有したのに対し，直接にノルウェーの司法の下に置かれ，公共の義務や商業上の制限からも解放される期間が続いた。

いずれにしてもドイツ人商人は，手工業者の活動とあいまって，ベルゲンの経済に独占的な支配力を持ち，その迫力に横暴さが加わり，ベルゲンのノルウェー人の経済に対する意欲すら低下させてしまうほどであった。この状況を生み出したのは，ドイツ商人が連帯している都市ハンザの組織力と，取引体制の強さに他ならない。ベルゲンの商人の出身地の多くはハンザの盟主都市リューベックであり，とくにそのリーダー格は，ほとんどリューベックの商人であった。リューベックの方針は，ベルゲン商館の方針であった。ベルゲンは，換言すれば「都市ハンザの居留地」[52]であり，ヴィスビーとは性格を異にするものである。

(4) 商館地区の内部構造

ここでは，本論の主要な目的である商館地区の内部構造について検討するに当たり，その資料について述べる。

ベルゲンは，1248年，1476年，1702年，そして1955年にそれぞれ大火に見舞われ，木造の建築物の多くを失ってしまった。このため中世の都市復元は困難であるが，手掛かりとなる資料として，1581年時のベルゲンを描いたScholeusの絵図[53]がある。この絵図は，当時のベルゲンのほとんど全景を立体的に表現しているが，図に描かれた建築物の様式，建物の切妻の数に問題があるとして，論議をよんだ。

1955年大火の後，考古学的な発掘調査が組織的に行われた。その報告書[54]は，中世における商館機能の配置と構造を解明する重要な資料を提供している。また，当時のドイツ人の生活空間については，現在，ベルゲンの旧商館地区の「ハンザ博物館」で復元したかたちで提供されている資料で，それを確かめることができる。

商館の成立は，ドイツ本土との間に共同企業が発生したことを意味するものである。ドイツ人商人は，本国の都市，リューベックの資本による企業体の代理者として商館の運営と交易活動に当たった。この活動の場が商館地区である。

商館地区は，ベルゲンの小さい入江の東岸に位置する地区に形成された。この商館地区を一般に“Tyskebryggen”（ドイツ人の橋）とよんだ。現在，この地区の海岸通りにはBryggenの名が残されているが，それは「波止場」または「埠頭」の意である。

商館地区は，港の東岸に広がる長さ約600m，奥行き200mのほぼ矩形の地区であり，その境域は明瞭である。

内部に，行政機能，貿易業務機能，港湾機能と生活機能を配置し，中世社会で重要な役割を果たした教会が立地して，それに付属した病院，学校なども置かれた[55]。中世を通じてベルゲン

の人口は5,000～10,000人と推定され，ピーク時のドイツ人人口は，船員を併せて2,000人に達したと伝えられている[56]。

自治行政組織をもつ商館では，複数の評議員が選ばれていた[57]。この評議員は商館員を統括し，商館を代表して，ハンザ同盟との折衝，ノルウェーの代表との外交に当たった。その人数は，時代により変化していた。1450年からは，この評議員を補助する複数の補佐役が配された。また，商館に秘書が置かれるようになり，商館地区の中央に位置する行政の建物に常住した。そこは商人の集会所でもあった。その建物は，ベルゲンのワイン貯蔵所に隣接していたが，この建物自体も長期間，ノルウェー人から借り受けていたものであった。このワイン貯蔵所などで，ノルウェー人とドイツ商人は，よく談合をおこなった。ゲルマン的制度のギルドの集会には，屢々専用の酒房を用いた慣習があったが，外地商館においてもそれが踏襲されたものと思われる。商館内部の係争は評議員により裁定され，最終上訴地はリューベックと定められていた。評議員の下には，数階層にわたる厳格な徒弟制度が実施され，階層により，その仕事の種類や分野が規制されていた。

商館地区の建物[58]は，木造の奥行きの深い箱型の建造物が連担し，この建物のユニットをGård と呼んだ。建物の幅は，中世では4～6m，奥行きは120～150mで，平均の高さは7mであった。家の正面は切妻であり，側面にバルコニーが配置された。たび重なる大火により原型が著しく変化し，当時の建物の詳細を知るのは困難であるが，その棟数は中世では20～30棟であった。

貿易業務機能と商人の生活空間[59]は，この内部に配置されていた。一般には，1階に商人の取引に使用される空間があり，計量器が配され，貿易品の見本などが展示された。2階の一部に別のオフィスが設けられていた。また商人の集会場が，広いスペースをとっていた。ベルゲンの主要な貿易品の魚の処理作業には，この建物の奥の空間が用いられ，塩蔵，魚油の搾油，乾魚の処理，樽詰などの作業がおこなわれた。屋内の貯蔵室のほか，屋外の石造りの倉庫も配され，建物は，魚の取引の管理的な機能と，生産の機能が能率的に結合されていた。

生活空間は，寝室，炊事場，食堂などに分けられ，その利用は商人の内部に存在する階層によって，厳格に使い分けられた。若い商人達は，徒弟として課せられた作業に当たり，日常生活，作業の分野，行事における役割などは，上位の階層からの指示に従った。しかし長期間の勤務の結果，上の階層への昇進の道が開かれていた。階層制による生活空間の相違は，寝室の様式の例にも表われている。上位のハンザ員の寝室には家具があり，冬の暖房も可能であった。それに対し，徒弟の部屋のベッドは粗末な箱型のものがとりつけられ，冬の暖房もなく，家具もない。冬季には，若い徒弟は学校で読書・筆記・算数・宗教の学習を課されていた。夏季は，それぞれの棟でまとまりのある行動がおこなわれ，作業・事務・定期市などの仕事に当たった。

以上のように，貿易の業務機能と生活空間とは，商館地区の内部で大きな部分を占め，リューベックの指示のもとに厳格な徒弟制度を基本として運営されていた。

港湾機能[60]は，ベルゲンの入江の右岸(東岸)に整備されていた。海岸には，起重機や，小さいドイツハウスといわれる小屋が規則的に配置されているのを，Scholeus の絵地図の中から読みとることができる。波止場に到着した魚類は樽詰めにして転がし，うしろの作業場に送られた。その際，Gård の棟の間の奥の道を通じてそれぞれの作業場に送りこむため，トロリーも用いられた。起重機を支えるポールは，行事の際，旗を掲げるポールに転用された。

この波止場の対岸に当たる通りでは，港の設備が不備で，着荷は水際から直接家に運ばれた。この対岸地域はノルウェー人の住区であったが，魚を求める時は，後に述べる手工業者の住区を迂回して対岸で目的を果たした。

ハンザの規約により，15世紀初期には11月11日から2月22日までの冬季の航海が禁じられ，

船の入港はほとんどなかったものと考えられる。

(5) 住宅地域の分化と教区教会

13世紀末から15世紀にかけては，ドイツ商人が日常生活においても，経済的にもベルゲンで極めて優位となり，しかもノルウェー市民に対して高圧的であったと伝えられる[61]。その結果，ノルウェー人は，13世紀末には入江の西岸，即ち商館地区対岸へと徐々に移動するようになった。ドイツ商人と原住者との居住のセグリゲーションの要因は，力関係によるものとしか考えられない。さらにドイツ人ハンザ商人と，ドイツ手工業者との間にも，居住分離がおこっている。

手工業者達の渡来者は，初期にはベルゲンの都市法の下におかれていた。しかし，1379年に一時的にハンザ商館の支配下にあった[62]が，その時も，商館地域のドイツハンザ員とは，明瞭に居住地区は隔離していた。この要因は，ドイツ手工業者の属するツンフト（同職組合）の組織力と，出身地域に既に一般的となっていた団体主義的階層構成や勢力対立の現象と類似した現象が，外地にも付随していたと考えられる。

さて，この3グループの居住区を知る方法として，教区教会の立地が重要な指標となると考える。Scholeus の地図には，16世紀における教会の位置が明瞭に描かれている。聖マリア教会，聖ニコライ教会，ハルヴァルツ教会，コルス教会などである。いくたびもの大火にあったベルゲンでは建造物の位置を確認することは困難であったが，1955年の大火のあと，1956～70年にわたる考古学的発掘の結果[63]，中世の市街地の範囲や，10カ所にわたる教会の位置について多くの部分が明らかにされている。

13世紀のヨーロッパでは，市街地は石造が主であったのに対し，ベルゲン市街地は木造建築が主流であった点に特色がある。また中世の海岸通りは，現在より陸の内側に位置していた。現在のそれは埋め立てによって海の方に拡幅され，人工地形の上に新しい市街地が広がっている。

商人教会の聖マリア教会[64]は1130～70年に創建され，1408年に正式にドイツ人の所属となったものである。教会の位置は商館地区の背後にあった。この教会は，リューベックの聖マリア教会が有力商人の礼拝と集会・書類の保管の場であったと同様に重要であった。その他，商館地区にはドイツ教会のマルチンス教会もあった。ドイツ商人がその周辺に集中的に居住したことは明らかである。

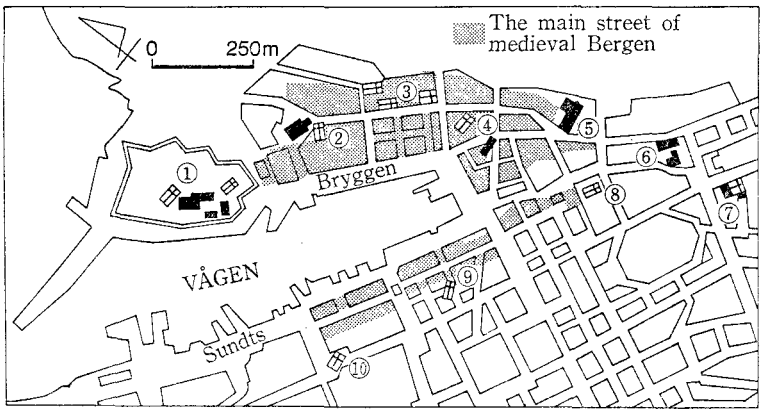
ドイツ人手工業者たちの教区教会は，入江の奥の東岸に立地したハルヴァルツ教会であった。最初に来訪した手工業者の団体が居住した地区とほぼ同一とみられる。上述したように，手工業者はハンザ商人とはその業務の分野も居住区も分離しており，彼等の教区教会の位置からして，その住区は，ドイツハンザ員とノルウェー人との中間的位置に介在し，毎年マーケットの開かれていた地域により近いところを占めていたことがわかる。

1558年，領主によって手工業者の教会が取り上げられた記録[65]がある。これはいったんハンザ商人の支配下におかれた手工業者が，1556年に再びノルウェー法の下におかれた事実と関係がある。この時期をもって，実際にドイツ手工業者の人口が減少しはじめ，ひいてはベルゲン商館衰退の動きに拍車をかける契機になった。

ドイツ手工業者がベルゲンで住区を形成したのは，13世紀から16世紀中期ごろまでと考えてよいであろう。

商館地区の対岸には聖ヨハン教会と聖ミカエル修道院があったことが記録に残されているが，考古学的な発掘の結果，聖ヨハネの正確な位置は未確認のままである。いずれにしても，ノルウェー人が対岸に移動したのち，その地域に住区教会をもったことは，当時の社会の情勢から当然であろう。

一方，中世ノルウェーの王および司教の住居は，Vågen の入江の東岸の先端，商館に接した城域にあった。天守をもった城は，現在なお歴史的遺構として存続している。この内部には王家の礼拝教会や王家の家族のための地区内教



① The Royal residences, St. Sunniva, The royal chapel of Apostles
② St. mary, St. Peter
③ St. Nicholas, St. Colomba, St. Martins
④ The church of the Holy Cross, St. Hallvards
⑤ The Fransiscan monastery church of St. Olav
⑥ The leper hospital of St. Jørgen
⑦ The Cistercian nunnery of Nonneseter
⑧ Hospital church of All Saints
⑨ monastery of St. John
⑩ The Benedictine monastery of St. Michael

図5　ベルゲンの中世の中心街と教会の分布

出典：Lidén, H. E. (1977) : 'Urban Archaeology in Norway' in "European Towns. Their Archaeology and Early History" edited by Barley, M.W. Council for British Archaeology by Academic Press. p. 90

会あがったはずであるが，現在その遺構はない。王城内は，司教の教会のもとに一つの地区を形成したことが理解される。以上のように，13世紀から16世紀にかけて，ベルゲンには3つの特性をもった居住区が形成されていた。ハンザ商人の居住した港湾貿易機能地区，ドイツ手工業者の商業地区と，原住のノルウェー人地区である。王城は，その地区と並んで一つの地域をなしていた。

この特色ある居住区の構成は，ハンザの衰退する16世紀末に変化しはじめ，17世紀初頭には，ノルウェー人を主とする中心市街地の形成がはじまっている。

VI. むすび

中世の北方貿易のために形成されたドイツ人居留地のうち，ヴィスビーとベルゲンを対象とし，その成立と居留地の機能，および内部構造を検討した結果は，次のように要約される。

(1)　ヴィスビー

①ヴィスビーのドイツ人居留地は，ドイツ人がロシア交易の仲継地として着目し，1161年に居留の特権を得た時に発生したと考えられる。ヴィスビーが，ドイツ人渡航以前に既にノヴゴロドに交易基地を持ち，バルト海商業体制の中核をなしていたことは，ドイツ人のヴィスビー居留を有利に展開させたと考える。13世紀にはここは城壁で囲郭され，内部に商業地区が形成された。海岸通りの巨大な倉庫に仲継基地の特色が見られる。

②ヴィスビーのドイツ人居留地は「商人ハンザの時代の居留地」として位置づけられる。この時期には，未だ商人の活動に対し，都市ハン

ザの強力な結束による支援がない時代であった。交易活動の主体は，渡航した商人団体によって主導された。遍歴商人と，定住商人の複合体の自治行政組織が存在した。市参事会はドイツ人にヴィスビー人も加わっていた。

③ヴィスビーの貿易業務地区と教会立地とは，強い相互共存関係があると仮定される。当時の教会は商人の唯一の保護者であり，合法的・平和的交易活動の前提として，商人の布教への協力もまた重要であった。既にゴートランドでは，ヴァイキング活動は終息していたとはいえ，原始的な習慣法が残っていた時代であったからである。以上のことから，教会の地理的分布を検討した結果，ヴィスビーの囲郭の内側は，a）ドイツ人渡航以前のゴートランド様式の町，b）ドイツ人の渡航者によって形成された市街地，c）王城を中心とした地域，の3地域を見出すことができた。その中で，ドイツ人の地区には，貿易業務の諸機能とともに，数多くの教会が集中立地していることが明らかとなった。なかでも，商人教会のマリア教会は交易の保護的な機能をもち，ドイツ商人に支持された最大の教会であった。

(2) ベルゲン

①ドイツ人の居留地発生の時期としては，1259年から冬季にもドイツ商人が滞在するようになった時期が重要と考える。正式の法的裏づけがえられたのは1276年であった。

②ベルゲン居留地の特質は，ハンザ都市の出先機関としての「商館」の地位を長期間保持していた点にあり，ヴィスビーの居留地とはその点で異なっている。

③自治行政組織が存在し，複数の評議員が選ばれ，商館地区の管理，ノルウェー側との外交，ハンザ盟主都市との折衝をおこなった。評議員以下，数階層の徒弟制度があり，商人はすべて男子に限られていた。またリューベックの出身者が多かった。13～14世紀には手工業者が渡航した。

④ドイツ人の地区は入江の東岸一帯を占め，貿易業務，作業場，魚の倉庫類が整然と機能的に配置されていた。同じ棟の中に商人達の生活空間があり，その空間利用は，商人の階層によって厳格に規制された。

⑤ドイツ商人とドイツ手工業者，原住のノルウェー人の各住居の地区相互間に居住のセグリゲーションがおこった。このことは注目すべき地理的現象である。各集団ごとの居住区を知るメドとして，教区教会の位置を明確にすることが重要と考える。その手掛かりとしての古地図や最近の考古学的な発掘調査報告その他の資料を用い，各教区教会を知ることができた。商人教会のマリア教会と，マルチンス教会はドイツ商人の，ハルヴァルス教会は手工業者の，ヨハン教会，ミカエル教会はノルウェー人のそれぞれの居住区の中心に立地していると考えられる。その周辺部が，各集団の居住地である。ドイツ商人は商館地区，その対岸がノルウェー人，両者の中間に手工業者のそれぞれの住区があったことが認められる。その他，王城に独自の教会が立地して一つの境域をもっていた。

以上の点が明らかとなったが，この二つの居留地のほか，バルト海沿岸の居留地の存在した都市の調査は欠かせない課題である。リューベックとの交易ルートやハンザ諸都市間の都市システムをさぐることは，興味ある今後の研究課題である。

（立命館大学非常勤講師）

〔注〕

1）阿部謹也『ドイツ中世後期の世界』未来社，1974．215頁。

2）藤岡ひろ子『神戸の中心市街地』大明堂，1982，34～47頁。

3）藤岡ひろ子「都心形成との関連からみた神戸市の商社立地変動」地理学評論54―1，1981，34～45頁。

4）前掲 2)，173～195頁。

5）前掲 2)，195～213頁。

6）Dollinger, P.: *The German Hansa*. (Ault, D. C. and Steinberg, S. H. (tr. & ed.)): Stanford University Press, 1971.

7）高橋　理『ハンザ同盟，中世の都市と商人たち』教育社，1980。
8）増田四郎『ヨーロッパ中世の社会史』。岩波セミナーブックス13，1987，165頁。
9）Planitz, H. 著，林毅訳『中世ドイツの自治都市』創文社（歴史学叢書），1983，26～39頁。
10）Pleticha, H. 著，関楠生訳『中世への旅，都市と庶民』白水社，1982，221頁。
11）高村象平『中世都市の諸相』（西欧中世都市の研究 I），筑摩書房，1980，65頁。
12）前掲 6)，pp. 145～149。
13）Angelucci, E. & Cucari, A. : *Ships*. Macdonald & Jane's Publisher Ltd, 1977, pp. 38—52.
14）前掲 6)，pp. 239—241.
15）Gotland Commune : *Gotland*. Gotland Commune, 1987.
16）このコインは，ヴィスビーの Gotlands Museum (Strand Gatan) に保存されている。
17）Brøndsted, J. 著，荒川明久・牧野正憲訳『ヴァイキング』人文書院，1988，21～22頁。
18）前掲 6)，pp. 7-8.
19）ハンザの外地の重要な4つの拠点（ロンドン，ブリュージュ，ベルゲン，ノヴゴロド）を商館と称した。各商館はそれぞれの印章をもち，法人格をもった団体であった。前掲 7)，pp. 156-157.
20）Ennen, E. 著，佐々木克巳訳『ヨーロッパの中世都市』岩波書店，1987，216頁。
21）ハインリッヒ・デア・レーヴェ（獅子公）。1159年，大火のあと，リューベックの都市領主となった。2つの河（トラフェ，ヴァーケニッツ）の川中島に位置する市が，その後，ハンザの盟主都市に発展する基礎を築いた。王の勢力は，北海とバルト海をはじめ，ライン・オーデル河各地方に及んだ。
22）前掲 7)，57頁。
23）前掲 20)，216頁。
24）12～14世紀半ば頃まで，ハンザはまだ強力に結集した都市連合を持たなかったので，北方交易は商人団の力によってリードされていた。その時代の居留地をさす。
25）ノヴゴロドでのドイツ商人に関連のある訴訟が解決しない場合の上訴地は，ヴィスビーとされていた。
26）前掲 9)，34～39頁。
27）前掲 20)，218～228頁。
28）高橋　理「十三世紀ヴィスビ・ドイツ商人による北方通商法の確立」史学雑誌88—11，1977，1～45頁。
29）装飾的な立体絵図で，教会の位置やタウンホールの位置は，他の資料の示すのとほぼ一致している。
30）Söderberg, B. G. : *A Journey Through the Centuries*. Gotlandskonst.（近刊のものと思われる）
31）前掲 28)，p. 33.
32）エーディート・エネンは，聖ウーロフス（聖オラフ）を，スウェーデン人のものと推定している。
33）前掲 20)，78頁。
34）前掲 30)，p. 30.
35）前掲 30)，pp. 107-109.
36）前掲 30)，pp. 126-127.
37）前掲 30)，pp. 122-123.
38）前掲 30)，p. 103.
39）前掲 20)，216頁。
40）前掲 30)，p. 102.
41）前掲 30)，p. 98.
42）前掲 30)，pp. 48-52.
43）立石友男『スカンディナヴィア—白夜・極夜の国々に』古今書院，1987。
44）Helle, K. : 'The Germans in Bergen in the Middle Ages' (Andersson E. B. (ed)) : *Bryggen-The Hanseatic Settlement in Bergen* (English ed. by Secretan, V.). Hanseatic Museum, 1982, p. 12.
45）前掲 44)，pp. 12-13.
46）高村象平『ハンザの経済史的研究』（西欧中世都市の研究2），筑摩書房，1980，42頁。
47）前掲 44)，p. 14.
48）前掲 44)，p. 14.
49）前掲 44)，pp. 15-16.
50）前掲 44)，p. 16.
51）前掲 44)，pp. 17-18.
52）強力なハンザ都市連合の支持のもとで設定されていた14世紀中頃から17世紀ごろまでの北方貿易における居留地で，商人ハンザの時代の居留地とは，区別される。
53）前掲 44)，p. 27.

54) Lidén, H. E. : 'Urban Archaeology in Norway' (Barley, M. W. (ed.)) : *European Towns-Their Archaeology and Early History*. Academic Press, 1977, pp. 83-99.
55) Scholeus の地図には教会に付属した学校の位置も書き込まれている。
56) 前掲 44), p. 20.
57) Alderman を評議員と訳した。
58) Wiberg, H. : 'The Architecture and Furnishings of the Kontor' (Andersson, E. B. (ed.)) : *Bryggen-The Hanseatic Settlement in Bergen* (English ed. by Secretan, V.). Hanseatic Museum, 1982, pp. 31-45.
59) Andersson, E. B. : 'Bryggen in Pictures' (Andersson, E.B. (ed.)) : *Bryggen-The Hanseatic Settlement in Bergen* (English ed. by Secretan, V.). Hanseatic Museum, pp. 47-99.
60) 前掲 59), p. 67.
61) 前掲 44), p. 21.
62) 前掲 46), 92～93頁。
63) 前掲 54), pp. 86-92.
64) 前掲 59), pp. 93-96.
65) 前掲 59), p. 94.

〔付記〕
この小論は，1989年度歴史地理学会大会（城西大学）において報告したものに，補正・加筆したものである。研究に当たり，弘前大学の高橋理教授から手厚いお導きを賜わりました。また，ベルゲンの地図資料の集収に関し，オスロー大学の Hallstein Myklebost 教授の多大な御助力を頂きました。その他の資料に関し，立命館大学の瀬原義生教授のお導きを頂きました。また，古地図のラテン語等の解読については，京都大学名誉教授，松平千秋先生から，スウェーデン語については，関西スウェーデン協会の Sven-Olof Rasby 様，大島高男様に，一方ならぬ御世話を頂きました。厚く御礼を申し上げます。

GERMAN SETTLEMENTS IN VISBY AND BERGEN IN MEDIEVAL AGES

Hiroko FUJIOKA

In the twelfth century, German merchants, attracted by the possibilities of the fur trade with Novgorod in Russia, chose Visby as a suitable transit port. Consequently, an agreement concerning commercial activity was reached between Lübeck and Visby.

In the late twelfth century, Bergen had been a Norwegian trading and fishing centre and it was in the second half of the thirteenth century that German merchants first obtained Norwegian trading privileges with respect to Bergen. Then during the medieval ages, German settlements developed under the strong organization of the Hanseatic League.

The urban structure and functions of German settlements of these two cities in the medieval age will be clarified focussing on the following two aspects.

(1) The relation between the German settlements and the geographical distribution of churches in Visby.

(2) The distribution of functions in the German Kontor and the urban structure of the Kontor area in Bergen.

For these purposes the map of Visby in 1361, presumably the oldest one now available, the old picture of Bergen in 1581 by Scholeus, and records on German Hansa were utilized.

Results are summarized as folllows.

[1] **Visby.**

Medieval churches, situated in the German merchant settlements of Visby, played essential roles for the development of trade in the medieval era through their protection of commercial activities. Distribution of various kinds of churches can be considered as good indices to show such relations. Thus the distribution map of churches was prepared and the following three districts were found to exist.

(A) old Gotlandic town.

In this area St. Olaf, St. Clemens, and St. Nicolai were situated. Their original buildings were built in the eleventh or twelfth centuries by visiting merchants from Baltic area before German merchants came to visit Gotland. Almost all of these churches are ruins now. This area had an administration building near the shore and market places developed on road sides.

(B) German town.

In the centre of the city a semi-circular road surrounded the old town hall from where German and Visby merchants administered the whole city. Many churches were concentrated in this area from the thirteenth century. St. Mary, the most important, was destined to become a German parish church in 1225. In the coastal area medieval trading functions concentrated, such as factories, packing warehouses, and stores, almost all of which were built under a strong German influence.

(C) The Castle of the King and its surroundings.

In the fifteenth century Visborg castle was located in the southern part of the city. Two royal churches are found in this castle on the old map.

[2] **Bergen.**

From 1259, German merchants began to remain in Bergen throughout the winter. This was a very important event marking an epoch and German immigrants increased gradually from this time. They constructed Bergen Kontor near the sheltered harbour of Bergen.

(A) The area including the wharf was settled by German merchants and was called 'Tyskebryggen'. The correlated wooden buildings(gard) were erected there. This community of German Hanseatic merchants had an internal jurisdiction system of their own and no female habitants were allowed. They had an assembly building in gård and elected the alderman, who controlled problems of Kontor, settled diplomatic policies, and acted as a liaison to the Hanseatic Conferences. In the Kontor there was a strict apprenticeship.

(B) Gård was divided into various functional spaces : offices, fish storages, workshops, warehouses, living rooms, and so forth. People could use these functions according to their work and status.

(C) In the thirteenth century, German craftsmen came to Bergen and began their activities throughout western and northern Norway. German merchants became, simul-

taneously, more and more assertive in both economic and social life. Segregation of living places among German merchants, German craftsmen, and Norwegians in Bergen started in the late thirteenth century. Each of the three groups had their own parish churches in their living areas. The segregation of living areas were made clear through investigation of the location of medieval churches by the old map and by materials recently obtained in the course of archaeological research in Bergen.